

入 試 年度	2026 年度	入試時期	II期入学試験	実施日	2026 年 2 月 24 日
課程	博士後期課程	研究科	文学研究科	専攻・ コース	英文学専攻
入 試 方式	一般入学試験		試験科目	英 語	
「解答」または「解答例」及び「出題の意図」					
I 【出題の意図】 Miriam Meyerhoff, <i>Introducing Sociolinguistics</i> (2006) からの比較的容易な英文（著作権保護あり）を出題し、下線部のみの和訳を求めることで、英語の基本的読解力を評価することが狙いです。11 の言語に国家の公用語として地位を与える南ア憲法を論じ、多言語国家における異言語間の線引きの意味、そして機能よりも感情にかかわる「公用語ステイタス」の意義について述べています。この二点につき、訳文から理解が読み取れるかが、評価点となります。 【採点時の観点】 文体や語彙の点で、文芸翻訳調の「こなれた」和訳は必ずしも求めません。あくまで 1) 構文理解、2) 文脈に沿った語義選択技術、3) 当該一節の文脈・状況の理解が充分推量できる程度の日本語訳能力——を評価しました。文学理論は「難解」とであるという評価、文学理論が現代人の思考に与えている影響、そして理論の効用が文意にそった日本語に直されているかが最大のポイントとなります。					
II 【出題の意図】 Jane Setter, “The Watling Street Divide: Romans, Anglo-Saxons, Viking, and Accent Prejudice,” in <i>Your Voice Speaks Volumes: It’s Not What you Say, but How You Say It</i> (2019) からの文章（著作権保護あり）からの一節を引き、その部分訳を求める問題です。古代ローマ支配時のアングロサクソン族の流入のあり方、彼らのアングロサクソン語の多様性、そして、原住民であるブリトン人達が、ケルトや British Latin と呼ばれるラテン語を素手、最終的に何らかのアングロサクソン語を用いるようになった経緯と、それがもたらす問いが述べられています。ブリテン島における言語接触の歴史についての理解が、訳文から窺えるかどうかの評価のポイントになります。英語自体は、英語史に少しでも触れている人であれば、十分理解できる程度の難易度です。 【採点時の観点】 文体や語彙の点で、「こなれた」和訳は必ずしも求めません。あくまで 1) 構文理解、2) 文脈に沿った語義選択技術、3) 当該一節の文脈・状況の理解が充分推量できる程度の日本語訳能力——を評価しました。					
合否判定の方法及び基準					
入学試験は文学研究科のアドミッションポリシーに基づき、これを満たす学生を募集することを目的に実施しています。 合否判定については、本研究科のアドミッションポリシーを満たすことを、総合的な視点により合否を判断しております。					